

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：33604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870857

研究課題名(和文) 中途身体障害者エキスパートスポーツ選手を対象とした自己変容過程の質的分析

研究課題名(英文) Qualitative Study of the Process of Self-transformation of the Expert Athletes with Acquired Physical Disability.

研究代表者

齊藤 茂 (Saito, Shigeru)

松本大学・人間健康学部・講師

研究者番号：10454258

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中途身体障害を受傷後、パラリンピック等へ出場したエキスパートスポーツ選手を対象とし、彼らの受傷体験から卓越した競技力獲得までの自己変容過程を明らかにすることを目的とした。データ収集は半構造的面接により実施した。

結果として、対象者は受傷後、障害を受容せざるを得ず何らかの代替選択肢を必要としていること、また障害者アスリートとしての意味を見出しながら、リハビリや義足でのトレーニングへと専心していく様子が明らかとなった。その後、本格的にパラリンピックを目指して新たな競技者人生をスタートさせ、トップアスリートとして、さらには「人間として」の自己再生も果たしていくという過程が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the process of self-transformation of the expert athletes with acquired physical disability by using narrative approach. Semi-structured interviews focused on the process of Self-transformation from the injured and disabled to expert athletes and competitors in the Paralympic Games.

As results, the process which follows was clarified: after the injury, the participants had no choice but to accept the disorder and they were in need of alternative choices. And they found the meaning as athletes with disabilities, continue to commit the rehabilitation and training with prosthetic legs. Then, they started new competitor lives with the earnest aim of playing in the Paralympic Games and the like as top athletes, and achieved also the self-renewal "as a human being".

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：中途身体障害者エキスパートスポーツ選手 自己変容過程 ライフストーリー

1. 研究開始当初の背景

障害者スポーツ選手を「エキスパートスポーツ選手」と捉える、新しい視点からの研究が必要

従来、障害者における運動・スポーツは医学的リハビリテーションの一環として取り入れられてきた。しかし、近年では競技レベルの高まりを見せるパラリンピックに出場するためには、定められた標準記録の突破や世界ランキングの上位にランクインすることなどが求められるようになった。そして、パラリンピックが厳しい条件をクリアした世界のトップアスリートだけが出場できる国際競技大会へと成長したことにより、障害のあるトップアスリートへの強化・支援の確立が求められる時代となったと言える(内田, 2012)。

これに伴い、我が国においては、日本パラリンピック委員会はアテネオリンピック後、障害のあるトップアスリートへの科学サポートの必要性を明確に打ち出した。そして(財)日本障害者スポーツ協会では 2006 年より、「障害者競技スポーツ科学サポート事業」の 1 つとして心理的サポートを実施しており(その他「栄養学的支援」及び「動作解析」)、障害者スポーツ選手の競技力向上を図るための取り組みを行っている。つまり、障害者スポーツ選手の場合、障害に目を向けるだけではなく、健常者の選手と同様に「エキスパートスポーツ選手」としての対応が肝要であり、こうした視点からの研究が必須となっている。

中途身体障害者がスポーツ選手としての自己を再構築するための理解が必要

大和田・柏木(1998)による「人生半ばで事故や病気のため身体機能や身体の一部を喪失した中途障害者は、生活上の急激な変化や多大なストレスを余儀なくされる」という指摘や、高山(1997)による「それまで健康に生活していた人がある日突然に障害者となり、身体的な変化や生活の変化、更には社会的存在の変化やアイデンティティの変化に迫られる」という脳疾患患者についての指摘のように、中途障害者は、人生の半ばで事故や病気により身体機能や身体部位そのものを喪失するため、様々な変化に迫られ、またそれに伴うストレスや喪失感等を経験する。その上で、治癒する可能性の低い、もしくは治癒する可能性のない障害を受容していかねばならないことは非常に困難であることと考えられることから、リハビリテーション医療などにおいても、「機能回復などの身体面だけでなく、精神面への配慮」(大和田・柏木, 1998)が求められている。

本研究の対象者である中途身体障害者が、受傷からリハビリを行い、さらにはスポーツ選手となっていく、まさに自己変容の過程においては、いくつもの心理的危機を乗り越え障害を受容し、さらに自己を再構築していかねばならないため、独自の心理的援助プログラムが必要であると考えられる。これについては Pensgaard & Ursin (1999)も、コーチや心理学者が身体障害者競技選手の心理的側面について理解を深め、向き合っていくことの必要性を主張している。しかし、障害者スポーツ選手をエキスパートスポーツ

選手と捉え、受傷体験から卓越したパフォーマンスを獲得するまでの自己変容過程に焦点を当てた研究は非常に数が少ない。

質的アプローチによる研究

近年の中途身体障害者を対象とした研究において、量的アプローチの限界が指摘されている(例えば内田ほか, 2008)。本研究の質的アプローチによって得られるデータは内容が豊富で深く、対象者の意識的及び無意識的な面をみる事ができる。具体的には、対象者がどのような動機や理由を持ち、何を感じ考え、行動したのか、自然で多面的で深い理解ができる。本研究では、対象者が受傷後にどのように障害を受容し、そして競技へと向かったのかという過程そのものや、その過程を通じた心理的・社会的変化、実際に生じた重要な出来事などの自己変容過程を対象者の心理の深層にまで立ち入って検討することができる。

本研究の広がり

障害と共に生きる者が増加し(平成 23 年度版障害者白書によると、わが国の障害者・児数は約 744 万人)、彼らの引きこもりや不登校等も社会問題化している今日、障害者の「個別性」を考慮した上での「生き方への援助」(内田ほか, 2008)が必要となってきている。本研究は、障害者としての生き方・生きる意味の再定義にまでつながると考えられる。また本研究の成果は、障害者のみならず健常者における医学的リハビリテーション及び障害受容や適応、またレジリエンスなど広範囲の実践・研究に応用できる点で、社会的にも大きな意義があると考えられる。

2. 研究の目的

上述のような研究背景のもと、本研究では中途身体障害者のエキスパートスポーツ選手(運動機能障害、四肢切断及び視覚障害等を途中で受傷し、その後パラリンピック等の国際競技大会に出場した選手)を対象とし、彼らの受傷体験から卓越した競技力を獲得するまでの自己変容過程を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

データ収集

本研究では、「語り手が紡ぎ出す主観的意味世界をすくいとることに重点を置く」(湯川, 2011)ため、桜井(2002)が述べているように、「語り手の主観的意味世界における認識や解釈枠組みそのものに焦点を当てる、対話的構築主義に依拠したライフストーリーの立場」で面接調査を進めていった。よって本研究における面接において語られた内容は、「客観的事実」として捉えられるのではなく、「主体の経験の主観的な意味やアイデンティティ」(桜井, 2002)を重視した、主観を通じた意味づけや解釈であると言える。本研究のデータ収集は、こうした基本的な立場を踏まえた上で、対象者のライフストーリーの聞き取りを中心とした半構造的面接(semi-structured interview)により実施した。半

構造的面接は、質問項目をあらかじめ設定してはいるが、面接者が必要だと判断すれば、面接の中で必要に応じて質問順を変更する、フォローアップの質問をする、調査対象者の答えの意味を確認する、面接中に湧いた新たな興味や疑問によって質問を加える、逸脱してさらに質問するなどの柔軟な変更ができる(鈴木, 2002; 澤田・南, 2001)。そのため、自由回答(open answer, free answer)による質的データを求めることにも適している(鈴木, 2002)、とされており、これは山田(2014)のいう「非「調査票中心主義」と通ずるものであり、そうすることで「調査者は回答者が物語を産出しやすい環境を整える」ことができると考えられる。

また、斎藤(2014)や岡本(2014)も述べている通り、面接は「決して対等ではない二者によって構成される」(岡本, 2014)ため、「“質問する人 - それに応える人”」という非対称な関係は避けられず、そこには面接における「権威性」があるという。そして、面接におけるこうした固定的な関係(上述の“質問する人 - それに応える人”という関係)からは「権威性」が生み出され、時には対象者の自由な語りをさまたげる可能性があるという。逆に言えば、「固定的な役割関係のなかでは出てこなかった語りが、この関係を離れて出てくる」(岡本, 2014)ことも指摘されていることから、本研究においても調査者である筆者も、「権威性を自覚して」(岡本, 2014)対象者と向き合うように心がけた。

なお、面接は、筆者と対象者による1対1で行い、対象者本人の了解を得た上で、そのすべてをボイスレコーダーで録音した。面接後には、トランスクリプト(テープ起こし)を行った。この段階で、名前や場所等の固有名詞は適宜変更を加えた。

データ分析

面接調査の結果は、個人内の体験の意味を大切にしたいと考え、個性記述的アプローチを採用し、対象者ごとに調査面接の事例としてまとめていった。対話的構築主義の立場から、対象者の体験を理解するうえで重要だと思われた「聞き手と語り手のやりとりそのもの」(湯川, 2011)を事例ごとに提示することにした。中込・小谷(2010)が述べているように、「研究者自身が現象に関わりながら事例の一つ一つを丹念に吟味し、心理現象の記述、および個人経験の意味づけを問うこと」によって、「問題事象の多様な意味を発見する」ことができるようになる。さらに、「語り手が様々な出来事や経験を、どのように意味づけてむすびつけているのかといった視点」(中込・小谷, 2010)も大切にしつつ分析を進めていった。

その際、トランスクリプトされた発話データの意味について十分な吟味を行った。やまだら(2007)が、「トランスクリプトを何度も丁寧に読むことで、それまでに聞こえなかった、あるいは見えていなかったものが発見され、研究者が自分の枠組みで世界を見ていたときには気づかなかった新しい世界の見方を学ぶことができる」とし

ており、本研究においても重要な過程であると考えた。

4. 研究の成果

先述のとおり、本研究における面接調査では、個人内における「体験の意味」(中込・小谷, 2010)を大切にしたいと考え、個性記述的アプローチを採用した。そこで、本節では対象者ごとにできる限り「聞き手と語り手のやりとりそのもの」(湯川, 2011)を事例としてまとめた。なお、ここではページ数の関係もあり、特徴的な3事例を取り上げる。

事例1

【対象者Aの概要】:30代男性(調査当時)、片下腿義足、個人競技

対象者Aは中学校から高校卒業まで同一の球技を続けてきた。大学への進学も決まっていたが、自動車で自損事故をお越し、その後片下腿を切断した。

事故直後について、対象者Aは「これ、できるのになっていうふうに、命じゃないんですよ、僕が思ったのは、(続けてきた球技)とかスポーツができるかどうかということが最初だったんですね。そこまで、まさかと思っているので、死ぬということは考えられなくて、意識もしっかりしていたので、それよりもその1ヶ月後には大学に入学ですから。だから、ヤバイなという感じですよ。とりあえず足のことと、スポーツのこと。他の身体とか全然問題なかったの、足がどうなっているのかなという、早く治療しないと、というふうに意外と冷静だったんですよ。パニックにならずに」と述べた。搬送後、緊急手術を受けた。「先生は1週間が勝負だと言っていたので、まあ足は一応あるので、状態は悪かったですけど、流れてくれないかなっていう、流れなきゃいけないと逆に思ったんですけど、それがだんだん3日間たって状態が変わってきて、もしかしたら流ないかもしれないという、壊死みたいなものが始まりましたから。(中略)3日4日してやっぱりちょっと状況が思わしくないなという。そうですね、何か少しずつ切断というのが大きくなってきたんですね、日に日に。不安っていうんですかね。『いや、そんなことないだろうな』みたいな感じで思いながら、でもそれを受け入れていかなきゃいけないので。受け入れの準備は結構早かったの、1週間のうちの中盤からもうだんだん受け入れる準備を、状態が悪くなっていたので」と語っている。その間には、「2,3日くらいまでは、何てことしたんだろう、自分の夢を自分で潰している」や「後悔しましたね、やっぱり」といった発話に見られるように、やりきれない思いも語っていたが、「もう受け入れる準備をせざるを得ないというか。(中略)原因を突き詰めても結局答えは出ないですし、やってしまったことは元に戻せるかといったらそんな事はないですし、それはきついですよね、その受け入れ方が」と述べているように、障害を受容せざるを得なかった心境について語ってくれた。また、「怪我の治療を早く終えて、義足をつけてスポーツをできる環境に行きたい」、

「そういうショックよりもまず早くこっちの方に上がっていきたい」等の発話にみられるように、その場にどどまりたくない、何かを始めたい気持ちを話し、「そこで道ができた」と語っているように、障害者アスリートとして歩み始める決断をしようとする。

しかしながら、「切断したときよりも、義足をはいたときのほうがショック」、「元々はトップクラスで選手やっていたのに、なぜ歩けないのかというそのギャップが一番きつい」、「やっぱりこんなにきついかなと、そこでまた後悔がきます」と述べているように、こうした感情が繰り返されることについて語っている。その一方で「人に隠れて(歩く)自主練、コソコソして練習しました」や、「歩く、走る、その後スポーツっていうのも出てきますから、段階を早く行きたかった、必死ですよ。毎日毎日同じことを何回も何回もやって」とリハビリを続けた。その結果、「やりがいが出てきた」や、「ちょっとずつ、身になっていくというのが実感できるようになってきた」というように、障害者スポーツにおけるやりがいや成果を、少しずつ実感してきたようである。

その後、本格的にパラリンピックを目指して障害者アスリートとしての競技生活をスタートし、「(どんどんどんどん良くなるので)本当に一番楽しい時期」を迎え、「毎日毎日できることが増えていった」という。さらに2度のパラリンピックを通し、「やっと選手らしくなってきた」と語っているように、再びトップアスリートとしての再生を果たした。さらには、こうした経験を通し、「ブレなくなった」、「考え方が変わった」、「スポーツ選手としてあるべき姿が分かってきた」と述べ、「人間としての自己再生も果たしたことが語られた。

事例2

【対象者Bの概要】:30代男性(調査当時)、脊椎損傷(車いす)、個人競技

対象者Bは小学校高学年から高校卒業まで武道を続けていた。競技引退後、高校卒業後の進路に向けた準備をしている最中にバイクで事故に遭い、脊椎を損傷した。

受傷時は、「『しゃあないな』っていうのが一番ですかね。でも、それより自分の身体のことっていうよりは、高校はバイク乗っちゃだめっていう決まりがあったんですけど、まあ破ってましたし。部活の監督も超怖いんで絶対殺されるんじゃないかなっていうのと、あとは卒業できるのかなっていう、高3のそんな時期だったんで、そういう方にどっかいいたら気持ちは向いていたんですよ。親にももちろんバイクは乗るなって言われていたけど、乗っていたんで迷惑かけるなっていうそんな感じの方が大きかったかもしれないですね。(中略)理由は分からないですけど自分の身体のこと冷静に受け止めていたと思うんですよ。」「(1週間後に)手術終わって、ようやく痛みからは解放されたというか、折れたままの状態で置かれている時は相当痛みもあったので苦しかったですけど、手術終わって楽になったんで、ようやくそこから自分の体どうなってんやろなって。感覚もないし動けへんからもう、無理な

んかなって分かってても何でなのかが分からなかったんで。それで主治医の先生に何でかって聞いたら、脊髄損傷っていう題の本を貸してくれて、そのまんまやと思ったんですけど、それを自分に読めるくらい割と冷静にいたんじゃないかなと思うんですよ。(中略)この先どうしようかなって考えたのはおそらく少し後だったのかなって思うんですよ。そこ(手術から直後のリハビリ)までは、なってしまったんやから仕方ないっていうのが中心だったんで。だから車いすに乗ってあちこち動き始めて、学校とかも行くようになって。通学ってよりは病院からの外出でテスト受けに行ったり、それくらいから元々友達やった子と比べ出したんだと思うんですよ。急に、歩けないってことに不安だったり悔しかったりして、そこら辺の時期は少し不安定になっていたと思うんですよ。でも、本当に短い時間だったと思うんですよ。どうしていいのか分からなかったと思うんですけど、車いすでも何となく生きていけるんやなって分かってからは、かなり安定してきたと思うんですよ。知らないっていうのが一番きつかったと思うんですよ。この身体で生きていかなあかん。それはしゃあないことやけど、分からへんってところが一番引っかかってたところだと思うんですよ。だけど、どんどん動けるようになって、同じ脊損の人達を見て出会ううちに、この人たちみたいに生きていけるんやなっていうことを感じたんで、そこでの期間は入院期間が7カ月くらいなんですけど、それと同じくらいですかね。まあ、退院して自宅に戻る時くらいには、その自分の身体についてのおそらく受け入れてたんじゃないかなと思います」と受傷から障害を受容するまでについて語った。

その後、病院で見た車いす競技のパンフレットなどをきっかけに、「これしかない」と競技を始め、「最初からパラリンピック行くと行って。競技用の車いす乗る前から言っていました」と障害者アスリートとしてのスタートを語った。そして、「障害者のスポーツは甘っちょろいもんやっていうのが元々あって、若いし、(武道)で身体も鍛えていたから、すぐ速くなるはずやって勝手に思っていたんですけど、初めてレーサーに乗った時は、まず乗り移るのが大変でした。もう、そこに収まるっていうのが、身体にぴったりで、身体を斜めにして尻を突っ込んだりとか、それがまずバランスがとれないんですよ。プルプル腕を震わせながら必死で乗りこんで、こんなに大変なかって、走る前から思いました。それで、ちょっと転がしてみても、スポーツセンターの中を少し転がしただけでまっすぐ進まなかったんで、普通の車いすとは違う乗りものやと思って。だけど、そこで萎えるんじゃないかって、やっぱり乗りこなしたいと思ったし、まあ、なぜそう思えたかというそれしかないってすでに思い込んでいたと思うんですよ。バスケもテニスも水泳もない。これしかないって、俺には、何かスポーツをするならこれしかないって、やるしかないって思った」、「入口から抵抗を感じた、これは大変な乗り物やと思ったけども、嫌だと思ったことは一度もない」と車いす競技を代替選択肢として、その後競技へと

没頭していく。

しかし、対象者Bは障害の受容について、「受け入れるってのが割と色んなタイミングで訪れるのかなって思う」とも語っている。それは、「父親として、例えば、男らしい遊びに付き合うことができなかつたりするんですよね、車いすだと。それで母親に肩代わりしてもらっているところもあるんで、それについてまた考えた時期もあったんですよね。それも一つの障害の受容みたいなのかなと思うんですよね。まあ、怪我してショックの時期から、否定期があって、受容期があつてとか色々あると思うんですけど、その受け入れなきゃいけないことがおそらく死ぬまで何回もあるんじゃないかと思うんですよね。その時の、事故してから直近の受容っていうのはおそらく個人的な自分自身の身体についての受容だったと思うんですよね。でもこの先もおそらく同じようなことが来るんじゃないかと思うと、一概には言えないんですけどね」と、このように、障害の受容しなければならぬタイミングは一度きりではなく、それぞれにこの先も何度か訪れるのかもしれない。

また、対象者Bは「車いすになったからこそ、車いす競技をやれるようになったっていうことをよく言うんですけど。球技はダメ、友達がやっている野球もヘタッピーで、（続けてきた武道）もそんなにセンスがなかった。そんな自分がこれだけはやれるかもしれないっていうものに出会えたっていうのは、事故して車いすになったからっていうのが一番のもとだと思うんですよね。身体の自由を半分奪われているけれども、その代りに自分の得意とするものに出会えているっていうのが、そこで考え次第って言われ方してしまつたら終わりですけど、もしかしたらそれをするべくして事故をしたのかもしれないと思うと、事故も悪くないかなーと。そこまでは言えないんですけど、もしかしたらフィフティー・フィフティーなのかなっていうのも思うんですよね。もちろん事故っていう出来事は、悪い出来事やと思うんですけど、その後の生き方とか、選択でその時のターニングポイントが良くも悪くもなるんやなっていうのは今でも思うことなんですよ」と、人生における自らが負った障害の意味について語ってくれた。このように対象者Bは、車いすアスリートとしての自己再生を果たしていると言えるだろう。

事例3

【対象者Cの概要】:30代男性(調査当時)、脊椎損傷(車いす)、個人競技

対象者Cは中学校で陸上部に所属。社会人になってから「趣味でマラソン」をやっていたという。20代でツーリング中にバイクで自損事故を起こし、脊椎を損傷した。

受傷直後について、「自分の場合、直後から意識はあつて、まあ意識はあつたけど痛みがなかったんですよね」、「痛みがなかったんで普通に起き上がろうとして、まあ起き上がろうとしたら、足が動かないって。(中略)脊髄損傷はねえ、知識としてはあつたんで、それかなっていうのは直後に思ったんで。でも、ちょっとその事故直後でパニックしている状態で動かないだけなのかな、

って思ったり、何とか起き上がろうとしてジタバタしていたんですけど」と語った。その後搬送された病院で「歩けなくなった」ことを主治医の先生から告げられ、「当時は、まあ歩けなくなって、今みたいに生活できるとは思わなくて、寝たきりとか」、「母親にも、祖母もアルツハイマーでその早いうちに介助の状態になっていて、それが事故の1-2年前に亡くなったんですけど、それは結構な介護で苦労していたんで。たぶん、母親に辛い思いさせてしまうのかなって思いましたし」、「今仕事に就いている仕事先の方にも迷惑かけかなって思ったし、これからどうやって生きていくかな、っていうのは、やっぱり不安でしたな」と将来への不安や後悔の思いを語ってくれた。しかし、「最初のうちは歩けなくなって、歩けないって言われても、まだ治るはずだと。しばらくはずっと治るはずだつて周りもそう言ってくれますし。そう思っていたんですけど、その手術終わって、車いすに乗れるようになってから主治医の先生に呼ばれて、そのレントゲン写真とかCTとか見せられて説明されて。その画像見たら、これは無理だつてなつて。(中略)受け入れるしかないなつて。そのころには段々と、リハビリの先生とかにも車いす乗っていても仕事もできるようになるし、車も運転できるようになるからつていって、人並の生活をできるようになるつてのは知識として教えられてきていたんで、まあ何とかそこから社会復帰、早く社会復帰したいって思うようになって」。(何でオレなんだろう、何でこのタイミングなどとは思わなかったかという質問には)「うーん、まあ、多少は思いますけどね、でもとばしていただいしょうがないなつて。自業自得でやついてそんな人に文句を言えたもんじゃないですからね。自分で、自力でなんとか立ち直るしかないなつていうのは」と、障害を何とか受容していかうとした様子を語ってくれた。その後、車いすによるリハビリを始めるが、「それ(日常生活や社会生活のため)が第一つていうのがあつたんですけど、そこではじめて障害者スポーツ見たんですけど、それまでの障害者スポーツに対してイメージしていたのがリハビリの延長みたいな感じの、地味な、ダサイイメージ持っていたんですけど、そこで実際見たら、ほんとに楽しそうだし、カッコいいし。それで、自分もやりたいって、ようやく思つて、競技を始めるが、「はじめは健康(競技名)でしたな」、「体力つけるためだと思つて」と語っているように、競技志向は強くなかつたという。

しかし、事故の約1年後に仕事を始め、その頃から徐々に競技へと傾倒していく。「地元で会社員で仕事しながら、その時は残業もしていたし、残業終わって7時とかから市営の体育館に行つて、そこに車いす用のルームランナーを、自分で買ったものを置かせてくれて。そこでローラー漕いで、ウェイトトレーニングやって、夜10時11時ぐらいに家に帰つて。で、また朝早起きして、10キロぐらい走つてから会社に行くつていう。(中略)(体育館が)閉るぐらいまでやっていたな。それで帰つてから、その車いすを漕ぐグローブいじつて、また遅くなつたりしていましたな」、「練習量なんかは今に比べてこなせないですけど、

まあ頑張っていたのは、今考えてもやっていたね」。その後、「地元では(競技)環境もよくない」、「完全に自立したいなって思って」、地元を離れ一人暮らしを始めた。また、この頃の心境については、「後悔しても意味ないですよ、無駄ですもんね。その時間があつたら、自分は単純なんで練習していた方がいいみたいなの」、「事故してからってわけじゃないんですけど、いつのまにか負けず嫌いな性格になっていましたね。割と子どものころは、全く闘争心とかなかったんですけどね。いつからこうなったかな」、「競技は始めたときの思っというの、競技通じてちょっと人として強くなりたいとか、そういう感じで。勝ち上がりたいってのより、強くなりたいという意識でやっいて。でもやっぱりやるんだつたらそりゃ頂点に行きたいって、やっぱりその一番の舞台つというパラリンピックなんで」と、競技への意識変化を語ってくれた。

その後、念願のパラリンピック出場を果たしたが、「本当に出たくて出た大会、苦労して勝ち取って、出られた大会ですけど。1回目だけですよ、出ることに意義があるとか、パラリンピック出ただけですごいとかね、言っいいのは、今回は惨敗。次回、思っしたのは本当に今までのやり方だつたら通用しないなつというの、すごい思っ。それで、次回も同じような結果になるんだつたら行かなくていいと思っすし、行く意味ないなつ。今までのやり方で続っいてても今より+

速くなると思っんですけど、その時ちょっと速くなついても、たぶん外国勢はもうさらにその上をいっいて、また同じ結果に終わると思っんで。もうやっぱり、パラリンピックつて国の代表ですもんね。国のお金で行っているわけですから、行くからには、メダル取りに行かなきゃいけないのは思っ。とにかくメダル取れる実力をつけるために、今はとにかく、全部、何もかも、その道具も、やり方も、走り方も全部変えつているところなんですけど」と、障害者アスリートとして更なる高みを目指していることが語られた。さらには、「日本では、その強化方法はまだわかってない状況なので、自分はちょっと人と違うやり方をしてみて、今これから育つてくる若手に継いでいけたらいいのかなつと思っすけど、何か残してあげたらいいかなつと思っている」、「日本人は今まで、一度も決勝に上がったことがない。そこで決勝で世界の強豪と対等に走れるようになつて、世界で初めて通用する日本人つというのが、目標。(中略)世界で通用する初めての日本人ついう」と、今後の目標について語ってくれた。

最後に C 選手は、「でも本当に幸せだと思っますね。こんな、好きなことだけさせてもらつて。本当に障害を負つたばかりのころは、こんなことは考えてもなかつたんですけど、本当にもう悔しい思っも楽しい思っもできるつというの、本当に一番ですよ。目標をもってやれているつのは」と、障害者アスリートとしての生きがい語ってくれた。

このように、中途身体障害者のエキスパートスポーツ選手は受傷後、当然後悔はあるものの、

怪我や障害を受容せざるを得ず、その代替選肢の1つとして障害者スポーツを選択していることが明らかとなつた。そして障害者として、またその後には障害者アスリートとして、リハビリテーション、及び義足や車いすでのトレーニングへと専心して行く。そして最終的には、こうした一連の経験を通して障害者アスリートとして自己再生を果たすとともに、「人間として」(選手 A)の自己再生をも果たしているという、中途身体障害を経験した後に卓越したパフォーマンスを獲得するに至つた中途身体障害者エキスパートスポーツ選手の自己変容過程が明らかとなつた

今後は2020年に開催される東京パラリンピックに向け、障害者のトップアスリートへの支援とともに、強化が求められる時代ゆえに、本研究のように障害者スポーツ選手をエキスパートスポーツ選手として位置づけ、彼らの競技力向上へとつながら研究が必要不可欠となつてくるであろう。

主な文献

中込四郎・小谷克彦(2010)臨床スポーツ心理学の方法とその展開. 臨床心理身体運動学研究, 12(1), pp.3-28.

大和田攝子・柏木哲夫(1998)中途障害者における受傷後の適応に影響を及ぼす心理・社会的要因. 臨床死生学, 3(1), pp64-74.

桜井 厚(2002)インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方. せりか書房.

高山成子(1997)脳疾患患者の障害認識変容過程の研究 -グラウンデッドセオリーアプローチを用いて-. 日本看護科学会誌, 17, pp1-7.

内田若希(2012)パラリンピック選手に対する心理サポート. 体育の科学, 62(8), pp576-580.

内田若希・橋本公雄・山崎将幸・永尾雄一・藤原大樹(2008)自己概念の多面的階層モデルの検討と運動・スポーツによる自己変容 -中途身体障害者を対象として-. スポーツ心理学研究, 35(1), pp1-16.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

齊藤 茂 中途身体障害者のエキスパートスポーツ選手を対象とした自己変容過程の質的分析. 長野体育学会, 2016年1月23日, 信州大学教育学部(長野県長野市).

[図書](計1件)

齊藤 茂ほか 松本大学出版, 地域づくり再考, スポーツを通じた子どもの“こころそだて”, 2016, 355(Pp103-127).

6. 研究組織

(1)研究代表者

齊藤 茂(SAITO, Shigeru)

松本大学・人間健康学部・専任講師

研究者番号:10454258